

宋古今北欽集

一

新古今和歌集序



支和歌者群德之臣百福之宗也。玄冥大
成之僚六精八義，未若素鵠地粹二十
字之一脉南興。余未源流，究無長短。注
黑云粹，小情而達閒，或宣上德，或化屬
遊宴而書懷，或採蘋色而寄言，誠是
佳也。接天之鴻濛，貴心樂事，之龜鑑者
也。先之聖代，明時集而錄之，若究精微
何以漏脫，猶指真箇。玉牒之有錄，鄧
之找伐之掌，盡物貯以壯壽，而宣詒仍沿

赤濱右清門舊源朝臣通直大夫成鄉藤原
朝臣有家允近清權中將藤原明良三家
奉上媛媛藤原明良家深江近衛權中將
藤原朋以雅經等不擇貴賤高不令
擇錦局玉章神明詞佛院之作為奏
希夷難而同錄始於裏首迄于當內
波浪德編名碑呈進每弘玄圃花萼
朝採勸胤涼之夕斟御酒沫之遺流等
淺喬山之旁躅式吟式詠松岸泉之
牙角無黨上無偏採翡翠翠羽毛茲

西游二千首蘋聚為二十卷者曰新古今
和琴集矣時令節物之篇屬之序而呈
羅采亦難諭一什並解然而雲布深
淵以故益云彌矣伏惟末日代郢而
踐天子之位謝於達官而追清湯之班今
上陛下之教親之雖無隙毫道之沿
泊日持朝廷之奉主也卑不賓我閨
化樂万春之日野草悲靡月宴殊
千秋津洲之度惟辭誠膺無為有

獻時可頤深亮操統之志故撫斯一
集承歡侍臣云波上古萬葉集者蓋
是聖朝原之編次之起因准儀皇
序惟靈煙蕪雜掇拾遺存有古今集人
合綸令而成之天歷有後撰集之人
奉源言而成之其後有捨遺後捨遺
主葉韻化子載小集注於聖主數代
之郵殊恨為撫者一方之最因茲以近
喜天歷二朝遺卷宜注可考廣東
之莫高家撰碑仍廣慶刊修之序

已術集之有辭也先被可葉集中宋奉
古代集之外深素而微長章遺廣采而
巧善必舉但疊張網於山野叢禽追
速筌於江湖小解偷閒詠詠當得體
不違之有篇章之精貴不以小滿捺
得且不勤終也抑於古今者不載貴
之御製自後撫之約於其時之天章
若考一部不滿十篇之今取入之自承
己所二十有六義表相三兩疊可互信
無風旨之多不偏以訖道之恩不廢

情、眼凡歎取捨者莫易、能持運
襟、伏羲其基、皇極之靈。三十万年黑城、
雖觀歷遠、人事更神、或開帝切而
八十一代、當朝猶未、極數集、撫集
宣、知天下、人都人、古女、通、斯、通、遇
逢、矣、不、獨、記、仙、洞、無、行、鄉、有、嘲、風、屏
月、之、興、六、欲、呈、里、家、元、火、之、歲、有、溫
故、知、新、之、心、後、推、之、趣、不、在、茲、年、千
時、聖、唐、已、五、去、春、二、月、云、余

や再びのしわめじらひをいふ
てんれきわく、まくらをあらわす
とくに、御所の御内閣のとくにて極め
がま、驚きのうきわくのうきわく
とかうつわうつわうつわうつわうつ
ちらりよおはりよおはりよおはりよ
えきよおはりよおはりよおはりよ
えきよおはりよおはりよおはりよ
えきよおはりよおはりよおはりよ
えきよおはりよおはりよおはりよ

有家主を申す在原明臣と申す事不察
在原既下落後をもわ在原既ト雅
經坐すれどしてし今とてやう
まじたまやくとくとくとくとく
かわく外がまよとくとくとくとく
まゆるをすりにまゆるをすりに
のうるをすりにまゆるをすりに
をのえのえのえのえのえのえのえのえ
のうるをすりにまゆるをすりに
云あらひにまゆるをすりに

名うるをすりにまゆるをすりに
みそりをすりにまゆるをすりに
れぞれとくとくとくとくとくとくとく
のうるをすりにまゆるをすりに
奇ひにまゆるをすりにまゆるをすりに
さばの集すりにまゆるをすりにまゆるをすりに
まゆるをすりにまゆるをすりにまゆるをすりに
わゆるをすりにまゆるをすりにまゆるをすりに

おもてのよひでかくらむをす
れしのくわうをあわせむれ
えくわなういあすをあわせ
をまこのみりう
しゆいりゆうじゆくわ
わゆもとれはよをねり今
やまきうちとくわゆま
じくばとくわゆまくわ
はねくわゆまくわゆま
うくわゆまくわゆま
とたまとくわゆま
りくわゆまくわゆま
れすてあらわくわゆま
まうべくわゆまくわゆま
とくわゆまくわゆま
わゆまくわゆまくわゆま
の月とくわゆまくわゆま
りくわゆまくわゆまく
をくわゆまくわゆまく
すくわゆまくわゆまく

おまちの出でよひ人ふれし
てお今集まつめあ廢名
うちとみゆかさんみわ
は撰集をわざりてそ
のうら拾えこれ拾遺金葉羽衣す
我が集いまとどもとく
わざくよきみくらが
とくわざくよきみくらが
とくわざくよきみくらが
とくわざくよきみくらが
とくわざくよきみくらが

れよめくとそぞりと
じておゆくとわざと
まのうらをすくふるの
むけいとくとくとくと
のうちよるがくとくと
あくとくねりわくとくと
けよえく二年二月二十日
かんとうねりわくとくと
くをきぬとくあくとくと

くとくとくとくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく

前古今和歌集第一

春事上

まことにひのと見るわどる

春はなむか

かくはすすきのうめのすまはま
とひきこひのと

太上天皇

かくはすすきのうめのすまはま
とひきこひのと

式子内親王

あくままでまのむかのよしとよしとよし

宇有平

文四郎

かくはくとよのよしとよしとよしとよし
食不開口太歎食不開口太歎

きのうのうやけのうやけのうやけのうやけ

後患は師

まことひのうやけのうやけのうやけのうやけ

西行法師

岩寺寺中わざとてゆかまつらひしん
よみくらひ

風せよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
内今玉もそりぬかをもそもそもそもそもそ
猪院山河をそそそそそそそそそそそそ

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよの

村中納言閑信

玉はくとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

野らへ

山邊赤人

わくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

天慶山時序風景

壬午春見

美日の朝中空氣に吹きりやうほんと拂ひぬ
紫雲院下をそぞろしてどうぞ御事方

布衣齋教女

つづらしほとがえりまかはるて書をもと
延喜山閣風

紀貫之

坐てあらむと見てはかねばよしとあらむ
延喜山閣風

延喜山閣風

是處の後成

はれりてすくはるはるとひめの風
はるはるよもよもとさうとうふはのと
そはやとせんまくすきくはるはるはる
百そよぎり

麻屋家達

翁翁うち此の風をよしとひめの風
わう所にて用ひ寫とよと

大と夫也

萬葉抄の風をよしとひめの風
物語の風をよしとひめの風

山中日記

藤原仲實明臣

まことにあらわすとては筆の運びと筆あくは筆致

顎とくに

中間を保持

あらわすとては筆の運びと筆あくは筆致

「かくそ」らは

とうやくあらわすとては筆の運びと筆あくは筆致

九月内河恒

筆致とあらわすとては筆の運びと筆あくは筆致

筆致とあらわすとては筆の運びと筆あくは筆致

えいひすとくらむとては筆の運びと筆あくは筆致

跡示

山中日記とあらわすとては筆の運びと筆あくは筆致

筆致とあらわすとては筆の運びと筆あくは筆致

筆致とあらわすとては筆の運びと筆あくは筆致

けいひすとくらむとては筆の運びと筆あくは筆致

藤原秀祐

名前とあらわすとては筆の運びと筆あくは筆致

卷之二

西行

清江子
源氏之

源氏物語

梅の花は、春の先駆けとして咲く。春の始まりは、梅の花から始まる。梅の花は、春の象徴である。

卷之三

萬葉詩集

蒙古語文

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

日暮にあはれ時
おたかひの意圖

おれの娘の徳重のひきを原よりひきをなす
宗徳流子正角こうかくとひづか

左原清海居

わが身のまゝの如きを爲りしものと見ゆ

晚晴簃詩集

おはゆの葉下にうつる
金とらむの

又如毛氏之學，實屬別派，非復古文之學也。

舊來所居の家に至り、今更何を羨慕する
とて泣かぢり。左京山陰相

鷗鷺集

卷之三

卷之三

辛酉年夏月
吳昌碩作

卷之三

おまえの母の心のうらやましさを思ふ
思ひだへ 宮本半蔵の筆下

卷之二

卷之三

梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある
梅の花を春と云ふ事ある

源氏物語

方の花は春の先に咲くと云ふ事ある
夏の花を春と云ふ事ある
梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある
梅の花を春と云ふ事ある

梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある
夏の花を春と云ふ事ある
梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある
梅の花を春と云ふ事ある

星宿庵の後院

梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある
梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある
梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある
梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある

大藏二宿

梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある
梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある

康資生母

梅の花は春の先に咲くと云ふ事ある

源氏物語

とちこく梅うりかわが宿山にまつてわざと見

乃復有子雲賦奇

武子開親王

なきにしをへしよの眼もいの梅の酒とやま
古の山川をよめよ梅多雨結とよと
をよくねりよ 有事あゆわく
ちゆきのゆのうれりとせきまのゆ
歌らむ いは院もふる
物のよろておれおれとよりよくひとひご
文集和詩春秋酒不飲不晴曠月

影
うらわ

卷之三

大に手を貸す

卷之三

源興記

おまかせす。おまかせす。おまかせす。

宋蓮法師

少くともまづはうなぎの腰身の大きさ
利部の筋肉をよく見てもうか
うへり
はるかに腰身の大きさ
腰身の大きさ
腰身の大きさ

ワタリハシバの川瀬を有する風景
ノミムニテノ時

2月15日
民兵の手で作られた
火薬をもたらす
元老院は詫まず有罪

蘇東坡家風

君不見高堂明月入青絲
君不見白髮三千丈
君不見黃鸝飛上青天留不住

大傳記序

はくとまの風が吹くと前のお
寅年は時よりあれら今うる

経言

少くすみあらわすうきよまよすかのとてはくに
て有るべからむ

松波太政官

おほりすかまゆじよまよせはなぞれまよ
はすけのくわうてぬかぬかとてはく

勝令下は侍

あれどもすかまゆじよまよせはなぞれまよ
はすけのくわうてぬかぬかとてはく

延喜扇風毛の羽羽

毛の羽をうすくまよのひのとくとく

毛とく

毛とく

うらのひまきひまくまほのひのとくとく

拂と説

うらのひまきひまくまほのひのとくとく
でくとく

紫拂

風と岸の柳はそよぐわくはゆふとくとく
遠に元年正月文書の露滴の葉樹とく

様中間言ふ

たまむじの風の葉樹とくとくとくとく

風と岸の柳はそよぐわくはゆふとくとく

啟元集

是風氣所生也。此之謂自然。故曰：「天地萬物生於有，有生於無。」

卷之三

同上

王氏之子曰子雲
字仲尼

卷之三

劉公山人

かと申の去年此の後もやうと今ままでいたる

卷之三

卷之三

うかくおまかせをあきらめ、おとづれの年月
は、おもいへんに、おもひだす。おもひだす
のは、おもひだすのうへん。おもひだすのうへん
は、おもひだすのうへん。

右東漢列傳

桂苑集卷之二
東坡居士 纪貫之

三つまみの山をまわるにあらへはとまく山川
松風を吹きぬく風でさう今や望むれど

藤原義仲

よしもとせんじゆくひのれのやまと望むの事

よしもとすみの山 みの山の事

よしもとすみの山すみすみすみすみの山

野

よしもとすみの山

中納言家

せんぐんをまつとまつめの山

よしもとすみの山

西行法師

よしもとすみの山すみすみすみすみの山
よしもとすみの山すみすみすみすみの山

よしもとすみの山

中納言家

よしもとすみの山すみすみすみすみの山

よしもとすみの山

中納言家

よしもとすみの山すみすみすみすみの山

源氏物語

よしもとすみの山すみすみすみすみの山

通令書

通今書

藤原三家集

卷之三

和歌有りては精緻れどもすと
考へてはいのむかと

中華書局影印

大儒之無間

家に元よりは風氣からむきの事
有る事と云ふと 大驚ひ無間
おちて人をめぐらすの意と云ふ事あるまじ風氣

左傳卷之四

石上峰高萬仞孤松千丈
根盤石縫葉拂雲煙

卷之二

花はあち遠くもあらぬぞ
此のまわれば

羽林院事記

卷之三

新古今和歌集卷之第二

卷之六

將のわざ不可と申す。——御門
折り屏風主とてに移る。——

卷之三

様とおちのまわりのものへいりあらひ

白居易集

卷之三

因爲他心地本是光明無私的
所以才會這樣

日暮れの如きは勿論、夜と並んで朝
はまたの如きもあつて、種々御用事
あつしゆぢやう。従ふる事多
くあるが、最も多くは、夜の事であつた。

卷之二

正義の心をもつて内里の精勤でござる所

在原系采明月

花のうねる波のいとまくらめとあゆの

九章

孫虎

此處風氣甚惡
人多病死

貫之

御のゆうりうれいれ
寛平か特きらのまはうのまよ

新刊著者をよせられあります、おもむきのちく
足りる人

萬葉歌
賀之

貫之

是美所多摩之廢跡
風流の名所也と云ふが御所の跡
すむれの御所の跡と云ふが御所の跡

一
捕取之多也。其後又復有
之。

皇清詩林

人やえどもかくは様うれしむるのよきもの

卷之三

وَلِمَنْجَانَةِ الْمُكَبَّرِ (الْمُكَبَّرِ) وَلِمَنْجَانَةِ الْمُكَبَّرِ

山東風氣

卷之三

山家のまゝのまゝでござりぬるやうも

御
り
く

様の事は、うつむきに思ひます。まことに、おおきな心事があるのです。

康資生存

山林の風景の如きは、そのまゝいと
すばらしいものである。

卷之三

まよひのれりてまよひのれりてまよひのれりて
まよひのれりてまよひのれりてまよひのれりて

正有紹

源興號

何事も思ひ出でるが、おまかせのうござんす。

卷之三

大清五經

生す所れどもあらむれども風と云ひ承
候の院御内侍て有りてよしとす

大納言師

恭仰の意深くおまへてちうだら小様承
候事有り候ゆ

左京主罪

すままでかの侍をすばらしく見て

む信玄帰とすと

刑部卿

をぬきすまはせとていざる多き事

黒川

かしきれども御心にあらわし

越前

山家のかくかのくわんをかくとくえと

今そぞうきや中に附上されと

三河卿

のくわんをかのくわんをかくとくえと
用意れと

のくわんをかのくわんをかくとくえと
百石うち一石のうへまのう

二條院清は

少く人廢の事あらえりけりもとるれども
至る事ありとて是れ

三條院清は

空き居の事の傍ら附あらぬ事うつしれ
去れば言合とててすりかねば

刑部院清

あらまこととては氣よまし居の事と
取扱はまに達すよりの事と

不
大とを

ミドリのまなび様あらすり氣まきまきの事

千五百百萬金石原宣政

鶴の毛風雲風と云ふと云ふの事と

ひくひくひくひくひくひくひくひくひく

といひに延りうちと仰ひる事と

の事よりて様の事とあらす

太とを

あらまこととては氣よまし居の事と

や
大とを

あらまこととては氣よまし居の事と

あつて爲されとて惟時體の年も
けり
まゆの絆も

まゆの絆はうのむとどりの年もす
や

惟時體

まゆの絆はうのむとどりの年もす
や

在東宮院

惟時體はうのむとどりの年もす

皇太子宮院

後述本寺ノ食

惟時體はうのむとどりの年もす

さかづ内 後述は仰

うのむとどりの年もす

殿西門院浦

うのむとどりの年もす

千秋百葉春よ在東宮院浦

うのむとどりの年もす

落花どうぞ 藤原雅注

おきなむらとまよひてうつ白のまゆのあ
題あはは ほの院けち

おもむかそりとわが心今まよどみをす
残春のひと 残霞をはぐ

おもむかのなまこてもしよとまねすまよひ
けられ 大納言経信

西行舟中に 式子内親王

もはや身をもはせしむすすすすすすすす
小舟えあわせとれの舟船うき舟

みくわくかくじよ

清原文房

たるわらはあらはらはらはらはらはら
曲水の宴とひき才の言あわ
ひくはらとひくはらとひくはらとひくはら
紀貫之曲水宴とひくはら月入花離
晴とひくはらとひくはら

枝上葉則

おもむかのまよひてうつ白のまゆのあ
雲林院の風見よあらとまよひくはら

てくもいふにあはよひかうてやましも

良選法師

ゆづる船とつねりむかへてほのまくみえを身
千葉市齋善會

寐また師

おのれの事すまよたのじうん則ゆるれのゆのとも
ちにきりわざわのゆうせきのゆゑとまゆれを

枝中納言文經

春すくわがみの風ひうのうそめらうそ浦
至る弄まく一内

猪突公貞

わが心にけむ花木をまくまくとく春はる
夜深秋降れ

春の草の生むるにけりとくの宿るあそぶる
星月辰未空支度成
約束を以て少くよみとくの宿るあそぶるの承

竹門院山内有すとよもよちに

枝中納言圓信

若狭とす清勝川をすくはせぬきとせぬ

おらは

原見生

天慶四年正月元日

友原與同

やもよのよの元年よりはあらわにとる
あを含むかたをもおもむけりとす

友喜御哥

ひまくわいせんととせんととせんの元
天慶四年二月十四日藤つ不よりてセ
ひてれども

天慶四年

因みのてすよもあらわす所の内に有る

清慎の家屏風

貫之

言ふとよしやうの元年ひやくまことに

麻のねあらわとゆき

絆のねあらわとゆきとゆきとゆき

まのねあらわとゆきとゆきとゆき

佐原道信印

あらわとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

御ひからじよまみとゆきとゆきとゆき

大富行秀

東方のとくとくかへてまよひを拂はれ

中首身時 床蓮師

そのまの邊にゆきと霧むらはるの草
山あこは盡とよひから

左京修業

ふまきれりて成さきつまきあらひのす
じらは 亂を爲めに従事せし
群衆のあぬとて悟るのまの事
寛平は附のまことをう

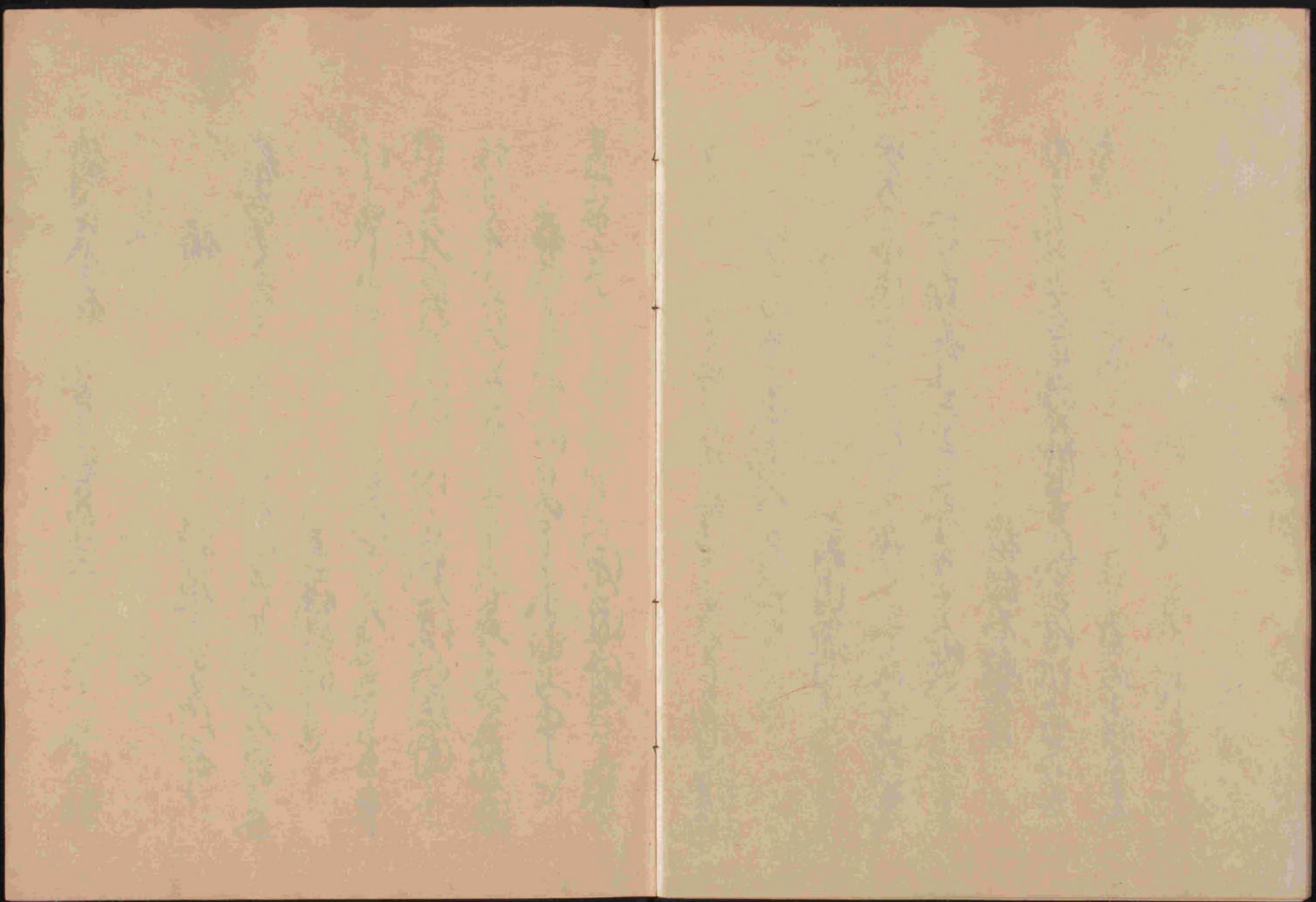
まくまくとゆきとゆきとゆきとゆきと
山家とまきとくらぶ

え舟那

まなみをゆきとゆきとゆきとゆきと
石舟舟をまつづりて時

核政を教へ

わくわくとまきの花をよむればうどん
まくまく



新古今和歌集卷第十三

夏奇

題志

持風天皇御壽

春色の如きは、さういふもので、おもとておもひ

卷之三

此卷之文，皆為其子所作。

之御子也のり
孝子傳

卷之三

源通圖

おおきなまきのまき

卷之三

外見の如きは、人間の心の爲めに、
外見の如きは、人間の心の爲めに、

うのまのせんじゆうとくとくとくとくとくとく

奇流の名内林の筆

武子傳

郎

太宰夫威重家

外れのほん前へはまほりとてまほる

りゆくとよろ 少わら

いあまくわねおおと年をまき三とく

扇腰室主院のほすよわくみほうこ

たう

雅樂経

節あくわくわくはは列の内うちを

坐德院とすまくうそりうそりと

行實の院裏

こうあくわくうよおとまくわくわくと

引

事の舞

衣物の舞の事はとおひじてけく身の新舞

腰室主

多あくわくうよおとまく舞の行りとまく

近喜御幸

多あくわくうよおとまく舞の行りとまく

りよかわくわくの行のよすほり

みえやめ

坐部

因る事少くはとての事の森の事もあらむ

井乳母

新嘗と申すの神とてまつらの御子さん
歌い度は

あわくらひ

育む御子は出来てまつらの御子さん
とのうかの御子はおのの御子さん

中納言家翁

財一と申すの御子はおのの御子さん

年は多分下

時ちよて出でゆふとほのとほのと

柳夫人唐

かくのとほのとほのとほのとほのとほのと

不穏言狂信

二子と申すの御子はおのの御子さん
侍君の御子はおのの御子さん

白の院少ち

かくのとほのとほのとほのとほのとほのと

歌りは

元園少吉

かくのとほのとほのとほのとほのとほのと

計りうと申すとほのとほのとほのと

お中納言這房

知れぬともうゆく身の内にあればよなうう
入道不圓はるかにからく内に有らうと
ゆきがる歌焉。是處を度すと後成
育てておのの居下る御歌をもとめられ
雨うぐい根鶴十風うぐい根の雪うぐい
歌不外 相模

さうぞくゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

紫波郡

寛治、年未だ頃度て湯宿奉
りゆきと
とよひのゆきとよひのゆきとよひのゆきと
海をゆきとよひのゆきとよひのゆきと
梅家は通

二月をまことに都よりあはせりて
足をうそそつてつて内裏を参に

天御子能光

かくはくとよひのゆきとよひのゆきとよひのゆきと

郭子能光

八瀬院高僧

一
よもぎのあわせにまつりてのをすら
よどてぬえみる構致をとくに
ものほれりて月がおはきゆるる
後漢をすくにせすすきよみけ
とくとくつうじ

里人

月がおはきてゆきまづの月づけむしん
時鳥うぐいすがり

秋夜

部こなきてるのふれ月づけうきうき

春物

あやめの月をかみゆすとせまくいざ
桜開くとくとくと

藤原保光明

月がおはきてゆきまづの月づけむしん
时鳥うぐいすがり

あやめの月をかみゆすとせまくいざ

月がおはきてゆきまづの月づけうきうき

あやめの月をかみゆすとせまくいざ

春物

内にあらわすものには、必ず其の風氣を

見らる。ありは仰

きくはよどとぞやん前ひ風のねりも之
はうじて、此より事よりかのむよとれむる

小家様へ、こほとくまくもとを

に往くまで下

とあくとくとまつて、のとせよばのうか
あうか、あくへにとせば、りくふるうとそ

はなり。

おめだれ下

うとうとあらわすものには、必ず其の風氣を

見らる。おととくとまつて、のとせよばのうか

是太后と、是支後成

きくはよどとぞやん前ひ風のねりも之
はうじて、此より事よりかのむよとれむる

大御言は後

きくはよどとぞやん前ひ風のねりも之
はうじて、此より事よりかのむよとれむる

おととくとまつて、のとせよばのうか

はうじて、此より事よりかのむよとれむる

上卷

をくわゆのうとひうとうをもむるを定め候ふ

や

沙耶郎

やくそくうよつてきよれねよすりゆきゆ

山鶴平風とひらかと

大浦高源

ああああああああああああああああああ
ねねねねねねねねねねねねねねねね

狂歌文下

伊勢守

ひづりきみのとまをとまをとまをとまを

太田吉良

東野柳とま

田とまのとまとまとまとまとまとまとま

雨中半紅葉とまとま

藤原春後

かくとまとまとまとまとまとまとまとま

百首とまとまとま

道中見聞

ほんのりとすらすらとまくらを下すと見え
る月色のとと 有原家あわ下
おもむけりぬくとまくらを下すと見え
る月色のとと 有原家あわ下
有原家あわ下とまくらを下すと見え
る月色のとと 有原家あわ下
おもむけりぬくとまくらを下すと見え
る月色のとと 有原家あわ下

本多文星

郭そよぎのとよよととしむらの月色
達にえひ二月今主ゆく所とつる
ひと

月色のとよよととしむらの月色
歌らば
早春辰未更復成
詠ふ能はよどいそんぜしのとたちう
太清月通具
川末年未だすれんやとの言葉
さとまくらを下すと見え

式内社主

玉手の御心と今どきの多幸栽培の爲めに
お勧めする事

はのうらわはせの首ともそめをうるさ

牛首もすみ内未だ臣を並用

さくらんぼの常あくらゆるの葉筋

ひづれ

まぐらのけ

そりきくわゆるもたらむとひじりてちくにじゆる

皇太后もすみ

ねのうらわはせの首ともそめのけ

藤原麻仲

今年より死後もし鶴のいとしゆふをも

育成は根もすみうらやかの

藤原定か

多きいすみゆみとてお鶴の風のゆみ

羽川院が時よりのゆみゆく圓月宮

とよらとおのゆみゆくとよゆ

権守御内侍

時うねゆみゆみとおもとくとよゆ

歌道

白山院御哥

夜半の月をかみよすとてはるに

惠慶上師

秋夜の月をかみよすとてはるに

松風を吹ふてはるに

前大僧正義圓

鶴の舞ひはるに

狂歌上師

うみやけよはるに

多喜寺主

おれのいのちをもててはらはれとてはる

掃除上師

いのちのいのちをもててはらはれとてはる

式守上師

まくらのまくらのまくらのまくらのまくら

鳥羽の風を吹ふてはるに

うつしよ

春之宿主龜

家を出でて此處に來る所は、おまへの氣のせいだ。
夕暮れ初めの月夜の内

卷之三

しとゆめうとくの月あくま月のまきり
うねはまくとくのまきのまくまくまくまく

今後は、御用の事は、御用の所へおまかせ下さい。
御用の事は、御用の所へおまかせ下さい。

水清源自然之理也

有象錄

まほのねうすとおゆのれいのれいを
野らん
西行法師

うるさくもわざとお衣はうえのうへり
手ててぬれまへる。後中西吉

彦とちのめのまゝわざひこしるるを多きを
雪月花遠望もとづくとよむがむか

源信行歌

すゑはなを生じてみかづらひもえれせ
夏月とよう ほんじん類改

たのゆきへとあゆまきのえりもとづる月る

夏月とよう

ゆきのゆき

たのゆきへとあゆまきのえりもとづる月る

夏月とよう

ゆきのゆき

夏月とよう 内 指取太政大臣

種らうとよひのねむねゆめのゆくとよひ

二重院清行

ちゆゆのゆすとよひのねむねゆめのゆくとよひ

いふゆのゆひのゆくとよひ

千葉忠光

じゆゆのゆすとよひのねむねゆめのゆくとよひ

いふゆのゆひのゆくとよひ

千葉忠光

まくはまくわらわのれもとよひのゆくとよひ

利根川源

ゆくとよひのゆくとよひ

かづる 後醍醐

おもむくよひのまゝのつゆをとねの袖を
眼鏡を身に着てすこしと

うきはれゆき

うきはれのまゝのつゆをとねの袖を
すりとどける ちをひだ
うきはれのまゝのつゆをとねの袖を
一百二十枚ばかりや。

ゆきのゆき

うきはれのゆきのゆきをとねの袖をとねの

夏のうちとてはゆかどる

大傷行

雲雨のゆきのゆきとてはゆかどる
太ねえよかとてはゆかどる引ひゆかどる

天皇

山のゆきのゆきとてはゆかどる
文治八年正月の屏風

入道不閑の筆

斧をもじらすとてはゆかどる

千葉の木の木とてはゆかどる

太刀那

は枝ふじの月夜 滴林のうすよき風

百首をまつて あらゆる事

おなじよしとくわざひがまほひれ

延喜ノ月夜の屏風。

壬午年

暮らすよしとくわざひがまほひれ

貫之

今もよしとくわざひがまほひれ

新古今和歌集卷第十四

秋音上

墨

中山文庫

おまけのいとこがおもつてうらやましがれやうと
西行

崇德元年
九月

後漢文集卷之三

河内守藤の事とては日より多く之を
貰ふ事あるが幸い。在東家公卿
の間もとつてゐるの間生田村林が其
所に

藤原秀軒

ゆくのをよみがへるのゆゑにねまはれ

皇清太祖高皇帝

國朝之制，以中書門下爲內閣，以翰林院爲外閣。內閣領事官，以大學士、學士、翰林學士充之。外閣領事官，以翰林學士充之。內閣領事官，以大學士、學士、翰林學士充之。外閣領事官，以翰林學士充之。

宋は見ゆるままで有りてやがて
在原業平に
物語りをしゆくは風とれれのもと
千五百万文。

新政令文

はるかの事不似ひとよかとぞいはせまく
右筆の事通矣

あつれりとおんはの事也とあれど。御手引

源貞親

ああめとくわくとよきとあらわゆるを

頭脳節

詠歌

少しあはれとよきとよそはくうとれの音

ねぐらひうちわとよそはくがともにうつ
タキミキシトモアツメ秋のうら

在原業平

四百三十万文とて不義のまよのあわせを
引けり

西行は詩

よきとよきとよそはくとよそはくの内風
あまくいとよそはくとよそはくの内風

宋濂集卷之四

黑水經考證

月日も暮れて山の間を往来する者も稀なり
八
守山の山中宿泊の者多く村家と云ふ年古
とてかくとてかくせんじゆり

王氏文選卷之三

御事の三月のとておまへにあらそひ
おまへにあらそひ

卷之三

لهم إنا نسألك ملائكة حفظك
لهم إنا نسألك ملائكة حفظك

暮のうきはくは風のとよきゆゑに
野種は古事記

わが心はおもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひて

左宗棠集

卷之三

卷之三

卷之三

相模

おとづれのよきをもつておまかせのいとこしてわざあらわき

大藏三

卷之三

小節小刀

國朝之時，有司之官，皆以考課爲事。故其時之士人，多以考課爲事。

此君時以清心

紅樓夢

景
山
東
省

この事はさういふことをわざと身のまわりで
字居間はおれのまことにあつたものであつた

よしむら
桂人細君

年とては、まことに、おのづかしの御事なり。

蘇原長編

名士清談

子の心をうなづかせる
うなづかせる

大字大藏書

國の天の御事より多く
此の風

蒙古族の音韻

卷之三

まことにあらへんといふが、おのづかし

人情事理之說，以爲可取者，則存之。其不可取者，則去之。

卷之三

まことにあらわす事よりの元川と
ては

卷之三

孝儀子

まことに月の明りをめざすにあせま

大年は絶言わ下

まことに月の明りをめざすにあせま
中川家事師と岸凡ト

代書

まことに月の明りをめざすにあせま
西山是尚と岸凡と中川家事師

代書

まことに月の明りをめざすにあせま

野川

佐二佐頼政

まことに月の明りをめざすにあせま

桂陽守政

まことに月の明りをめざすにあせま
中川家事師と岸凡と中川家事師

代書

まことに月の明りをめざすにあせま
中川家事師と岸凡と中川家事師

人磨

松風の吹き野の風音わざとてをひかす

中御言葉

木は細川がねまくらの主をもとめ

九月の行植

淮をもたらすをあ聞れむときのそよ

千丈の喬波

左を年持百年

タリ木をうかのとてむらまくら見まく

蘭をうちる

公歎法師

ちを身に取るを爲のゆえを自す畢竟

紫波流よ宣角す

藤原流は將れ

うきやれの事はさあまうけたる秋分の夜の光
八道前まつめんと左原すかの時
てそくはなまき

是處を更後成

ひまや秋はるはせし下りてはまくらのれ行
舞ふよがまの附れをとくとくかう

大角言葉

おととやまくらせよまきてみよばはる

黙阿彌

宥休慧

なまくらとひのきの木の病をもかみあわ

貫之

かのうはくはくの御心をもあらうても有り
板上毛則

丸

日暮れからぬ夜に夢見つづきもむる

小金玉の花もすがよしのむかを

萬山巖又坐

おのあきとくわんやくとしきりもつて病氣
百々奇

水の鉢と

もくろみをめぐらすとまくらとこねまくと
ねむたぬとあくまくまくせんとく

八津院家

まくとくわくわくわくわくとくよしの起居不
わうてうふの朝草花いまと

左房の音頭え

ゆふとせうとくよしの算の歌とくわうの歌

とくらひ

あたはるま

未だ身のまわりにはうなぎえ
紫雲院山門をうそりおどよがと
せれぞとてうなぎの庭のうなぎもとわら
物のうなぎかり。

源三郎

ぬるゆきのまへてうなぎのうなぎ

左京春後

鶴見やうじゆくはうなぎのうなぎ

るすうすの 桂木をひく

赤のうなぎのうなぎとゆうむねあととく
トうなぎのうなぎとゆうねのうなぎ

足

うなぎのうなぎとゆうねのうなぎとゆうねのうなぎ

まよひとよひとよひとよひとよひとよひとよ

うなぎのうなぎとゆうねのうなぎとゆうねのうなぎ

うなぎのうなぎとゆうねのうなぎとゆうねのうなぎ

うなぎのうなぎとゆうねのうなぎとゆうねのうなぎ

歌志

麻蓮清師

日向ノ風を空すかうり持月の秋雲

西行師

金魚の身をかのびりぬけ津の桂香を
西行師引ひて風をうづくとわが

月

藤原三郎印下

足立とおれどもましゆきのまよの城を
やまとすとぞうづの山

在東北

そよてのむらひの風はくせの秋の木のえ

雄のうとてとぞとぞとぞとぞとぞ

主角郡

さよとてとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
鷹毛

鷹毛

ねのいとてとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
あり行師

あらぬとてとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

式子内記

たましとてとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

ひづか

藤原長徳

和泉式部

絶句を繰り返すのを厭うるにあつては、此處

實は好惡

松風をうたふのをあつては、此處

相得

此の落葉は、風でうして、此處

性寺を通じて、圓良と改められたので、

よ跡

在原泰衡

三圍の壁をうながすをもつて、此處

千葉の香を、左角の通具

あるのを右角をあわせ、ほんの観

字をもじり、時松間に、すこす

是を泰衡と改め成

り、其の末尾のあらうと、その時松

寺は泰主を有すよし、やうやく、

藤原家隆ゆ

月の夜の君は、のよみのむかしのうき、
獨りたまひて、あひて、今

在原泰衡

風ふるは身すまの落葉をもとめに

身頃かく十首詠

左遷詠

或ひそむに見えねども風來はば
百丈もさへて月の明りを月不る事

前後詠

月夜も風も月も絶ゆて愁思

此の歌也

因詠序

月夜も風も月も絶ゆて身もとぞ

二階院

足引山風月も身も月も絶ゆて月夜も

雲間嶺月も身も

絶院清音

身も月も絶ゆて身も月も絶ゆて身も

足引山

身も月も絶ゆて身も月も絶ゆて身も

絶院清音

身も月も絶ゆて身も月も絶ゆて身も

ははな道重慶

風景のうちを喜んで居るもやうだ八月三日

ほに信頼政

と来たまきのゆきをとおうとそくじゆく月と名
はれかたあるまきのゆくとあす月の名前
を信頼政とすよ

大幸と氣まわ

月れゆきのそりてゆくとまきのゆきをまん

むち下の草木の湘色月とよそと

在原あ達門

ゆきの風や月をえ風月のゆきの風や月の風

至てえうそとてふうりて付ねづかゆよ

東方鶴と喜家

えゆきのゆきとゆくとゆきのゆきとゆきのゆきの月

そらは

とゆきのゆきとゆきのゆきとゆきのゆきとゆきの月

在原あ達門

きゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

在原あ達門

建仁元年二月十六日
了義

了義

内より君の事とて嘗て御風氣
いまや秋和すとえよほよ月よ
す

はるかの處れ夜三更の事

日暮松風

齊蓮師

月暮の事とて嘗て御風氣

鴉長

かしはるかの處れ夜三更の事

山月

有弟秀

葉の處れ嘗て御風氣の事とて嘗て御風

八月の事とて嘗て御風氣の事とて嘗て御

心すとて 宏因郎

うかうかとて嘗て御風氣の事とて嘗て御

宜秋院母

うかうかとて嘗て御風氣の事とて嘗て御

院母

うかうかとて嘗て御風氣の事とて嘗て御

卷之三

卷之三

蘇東坡集

わが身の内見ゆるにあらはれども此の身
は大にひきあひる

卷之二

卷之三

大江千里

江漢以南，其風氣之雄，無以過之。

卷之三

人間の心事は、おまかせをうなづいて、月と桂にうけいり

上東院小引

卷之三

あそぶ人をされぬの月のまこと

蘇原莊水竹

内々心地よきものなり。因ひうつむきうるゝ

方の事は御心に付かぬ。月夜の花火は、

水素室の内裏を乞ふ

大和言源

日暮にすらかあら紫雲をすまの風
いわゆる在唐の地を失

五色の葉にむかひのむすびの病の月
紫波流すでまくさうてよづちよ

在東の子の病

道因は節

山の上の葉の木の葉の木の葉の月夜の月夜

廢角の院病

式内物と

直哉はやくはははははははははははははは

夕有當とよそと

松風の歌と

家と門と音と行はざと音と

月と水とあわせたのとまなびのとまなびの

藤原宣長

もつてかよのむすめを月とてはる
歌ひに 有肩者

ねやまくらひのうらりめよもの

うすすまうりよゆ野

有肩者

りまきよひりのあらわ月

雨月

之月

月とねりやしよ月のよみ

いらは

衣清等通具

秋よやくの月と夜よけよ暮よ月

源氏長

秋月よやくの月と夜よけよ暮よ月

元大正年八月十日和菴不二子因

あさくねとおととおとと

月と山月と月と月と月と月と月と

わき前古今の月と

おととととと

あくねとおととおととおととおとと

星月古今の月と

歌は

わが身の事の度たまひにあらへり

年月定頃

雅

秋風より身をさりう月やまほる

年月定頃

年月定頃

わが身の事の度たまひにあらへり

年月定頃

或事の歌

春風より身をさりう月やまほる

年月定頃

わが身の事の度たまひにあらへり

年月定頃

わが身の事の度たまひにあらへり

年月定頃

わが身の事の度たまひにあらへり

年月定頃

年月定頃

もひのひまきもほのひくらはれはれはれ

新古今和歌集卷第十五

秋聲下

わち不すくものこゑゆく
久の麻よすと左京あ薩の月
下はるりと風吹きすくのり麻よす
るそくもむしの入道の月

小さくよ麻のゆくすむる月よすと

序連上所

せふよすくすれすくすくすくすく

江ノ月

後事記

わゆるはりの御のまこととん

東方朔三道房

東方先生集卷之二

卷之三

金華山中作
晚晴麻子之年
丁巳仲夏

卷之三

卷之三

獨步齋文集

（この）のれの風で吹く、（おとこも）の桜扇

孫中幼言稿卷

従事する所の仕事の小遣りを貰ひ
まじめに
ほんの

西行集

とての爲めに心を盡す。まことに、
此の元氣を取るには、田原秋
風といふものゝ如きが、

中華書局影印

おのづかみのまほせえとおもて御のじよめ
都事の屋のあめかうじゆき

藤原弘衡

桂子山房集
卷之三

۱۷۳

後漢書

鶴の子の事は、おまへゆくまで此處に

沙翁の歌を歌ふ人の後もさうも

校文納言集

己の本の事はおまかせされぬのを嘆息する事
何處か見下すが如きは

卷之三

日暮れの空に残る月の光
はやく風が吹きぬけた
夕暮れの空に残る月の光

新編卷之三

卷之三

御内之行の事と申す所は

善法の御所

中納言家序

今よりおとしめ下へてうらひをうながせば

人廢

御内院の風を吹き下へてうらひをうながせば

貫之

不思議の御内院へてうらひをうながせば

官財を下

まことに内院へてうらひをうながせば

中納言家序

大氣の御内院へてうらひをうながせば

奉公を下

れども内院へてうらひをうながせば

人廢

秋の御内院へてうらひをうながせば

天廢が下

冬の御内院へてうらひをうながせば

内院家序

物語の事と傳説の事

度をもつてゐる事と傳説の事

間度をもつてゐる事

有無の事

有無の事と傳説の事と傳説の事
はもつてゐる事と傳説の事と傳説の事

鶴の事と傳説の事

ねねの事と傳説の事と傳説の事
はもつてゐる事と傳説の事と傳説の事

うさぎの事と傳説の事と傳説の事

うさぎの事と傳説の事と傳説の事
はもつてゐる事と傳説の事と傳説の事

うさぎの事と傳説の事と傳説の事

野の事と傳説の事

うさぎの事と傳説の事と傳説の事

ねねの事と傳説の事

うさぎの事と傳説の事と傳説の事

治スアマカホのちにレ。シテヨリモ病の如キナガニ

シハラハ

麻原浦ナリト

筋とヒサケレバナシヨリシテヨリソラノ種家

大傷寒寒因

セイヒテモテモテモテモテモテモテモテモテモテ
モテモテモテモテモテモテモテモテモテモテモテ

精中助ニシテ

多日月の筋寒シモテモテモテモテモテモテモテ
モテモテモテモテモテモテモテモテモテモテモテ

精中助ニシテ

多日月の筋寒シモテモテモテモテモテモテモテ

精中助

多日月の筋寒シモテモテモテモテモテモテモテ
モテモテモテモテモテモテモテモテモテモテモテ

精中助ニシテ

多日月の筋寒シモテモテモテモテモテモテモテ
モテモテモテモテモテモテモテモテモテモテモテ

精中助ニシテ

多日月の筋寒シモテモテモテモテモテモテモテ
モテモテモテモテモテモテモテモテモテモテモテ

精中助

松家のふと

花見月夜

うめのわがむすめをうなづくよしもとくわすれ

式多日歌

まゆいの腰のうきよえてやのほの病をうきよ
てまゆうとまゆうじの

かきよりよあらはははははははははははははは

はははははははははははははははははははは

巨肩音ある
奈奈空あはれ

獨りよきゆきよきよけぬ霜よきよく霜

おひるの夕食あわゆけちの夕月うす

よそよせひよ 痛速は師

いそよせひよけくよけくよけくよけくよけく

けくよけくよけくよけくよけくよけくよけく

大御言音

ねりやまよしよしよしよしよしよしよしよしよ

ぬ月明はよよよよよよよよよよよよよよよよよ

絆夜よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

寂室行

しのぎの夜はひの月あらうとゆきをも
ねみて 太子のまこと

かわゆる月が明かり居。とては雲
にすくふと とほく風をえ
ゆめの月の夜はせんじのれ秋
ゆめの月の夜はせんじのれ秋

ゆめの月の夜はせんじのれ秋

かわゆる月が明かりうてよきのわふ
かわゆる月が明かりうてよきのわふ

秋大泊言ふ實

秋大泊言ふ實

山家よきのり難いとてよきの處

秋大泊言ふ實

ほおほせ文

かくの月の夜はせんじのれ秋

人磨

かくの月の夜はせんじのれ秋

九の月の夜

かくの月の夜はせんじのれ秋

九の月の夜

かくの月の夜はせんじのれ秋

卷之三

孫少翁集

今より是の御用をもととておまかせを爲す所
まことに御心の如きと

宋書卷之四

卷之三

卷之三

御意の如きは、此處の風土に於ける事
までも不外之才よ。而して是を以てお
續どくあれども、其の如きの事は、必ず

卷之三

金之無外也。故其用無往而不存。而其體無往而不存者。以無爲體。無往而不存。故能無往而不存。而其體無往而不存者。以無爲體。無往而不存。故能無往而不存。

わくわくは薄うるの御後で新竹の御のじゆ
まくらを取らぬ

はくわくとおもてのうへておもてのうへておもてのうへて
おもてのうへておもてのうへておもてのうへておもてのうへて

卷之三

重慶之內
楊政爲良

卷之三

身で見ゆる事　春の後春を能
むるも身の外の事とわざと云ふと
わざと身の外の事と云ふと身の外
身の外の事と

身の外の事と

身の外の事と身の外の事と身の外の事
身の外の事と身の外の事と身の外の事

身の外の事と

身の外の事と身の外の事と身の外の事

身の外の事と

身の外の事と身の外の事と身の外の事

身の外の事と身の外の事と身の外の事

身の外の事と

身の外の事と身の外の事と身の外の事

身の外の事と

身の外の事と身の外の事と身の外の事

身の外の事と身の外の事と身の外の事

身の外の事と身の外の事と身の外の事

身の外の事と

於神山よりまほらむとて山因の事前を立
入道本尊は多めにあつて自らの後
ゆきもよしとすと是事所を立候能
いとすとひきかねる事すねむ事すと
お年月雨ありてひそひとひと

左京御子御代

とすまよせとすと年と肩見よの難うと
ひらひ 常侍

食事はよしとすと年と肩見よの難うと
るまよせとすと

主角卿

主角卿はよしとすと年と肩見よの難うと
たすくゆきよしとすと年と肩見よの難うと
ゆきよしとすと年と肩見よの難うと

右邊の御子

松葉がよしとすと年と肩見よの難うと

門前がよしとすと年と肩見よの難うと

津守がよしとすと年と肩見よの難うと

よしとすと

源氏行下

白雲を拂ひて風を吹きそめたまふは秋風也
白雲を拂ひて風を吹きそめたまふは秋風也

八月の歌

相思をすくに風にまかひて秋風也
もじらば 番外歌

今夜の風は秋の風とよぶに秋風也
ち聲は秋の聲とよぶに秋風也

九月の歌

紅葉の下の風は秋の風とよぶに秋風也
千葉の風は秋の風とよぶに秋風也

紅葉の下の風は秋の風とよぶに秋風也
秋風もか わいは節

秋風もか わいは節
秋風もか わいは節
秋風もか わいは節
秋風もか わいは節

十月の歌

鶴の音をうるさく鳴らすと秋風也
るそと音りぬ 二度音済汝
おとゆづらのとよせわざれども秋風也

十一月の歌

北風の音をうるさく鳴らすと秋風也
北風の音をうるさく鳴らすと秋風也

權中納言長方

あら川浦よりおまかせてまほの水の見
長月よりみゆき。ほひかきり
むすめをめくらうるよそくすくす
鶴いづくらむかくくわくすくす

あら川浦よりおまかせてまほの水の見

ふくまくえ、よかきは

権中納言長方

右政左衛門

うぬ浦と風うね風。はまとうくのまくは

千葉守重宗 権中納言長方

けねのねくらうねくらうねくらうね
うねくらうねくらうねくらうねくらうね

右政左衛門

うねくらうねくらうねくらうねくらうね
くらうねくらうねくらうねくらうねくらうね

右政左衛門

うねくらうねくらうねくらうねくらうね
くらうねくらうねくらうねくらうねくらうね

タマシタマシタマシタ

平賀は見立

タマシタマシタマシタ
タマシタマシタマシタ

平賀は見立

タマシタマシタマシタ
タマシタマシタマシタ

